

礼拝さいこう

協力伝道の新しい景色をのぞみみて

教会音楽室長 江原美歌子

日本バプテスト連盟教会音楽推進の立ち上げより64年、これまで「伝道集会用賛美歌集」「教会音楽研修・テキスト発行」「創作賛美歌運動」「礼拝音楽研修」「賛美歌検討」と、多岐に亘る働きが主にあって導かれ、沢山の恵みと祝福をいただいてまいりました。「賛美歌のことば」の課題では、対話が多方面で起こされ、コロナ下にあってもZoomを通しての全国の皆さまと語り合う場は豊かにされてきました。「ことばを意識するようになって、もやもやして歌えなくなった賛美歌がある」という声が語り合いの中で聞かれるようになりましたが、「問い、問われつつ」歌うことは、戸惑いながらも成長をいただいていることと受け止め、互いに励まし合っています。先の見えない時代にあって、共に歌う行いと学びあいが、教会を立てあげ、和解のつとめに仕える力となることを気づかされています。これまで、諸教会・伝道所の皆さまと育んできた『新生讃美歌』により協力伝道に連なり、学びと対話を深めてくれたことを主に感謝します。

今機構改革にあっては、その歴史の閉幕ではなく、「みんなで協力伝道」の第二ステージの「始まり」と信じています。『新生讃美歌』を共に歌うことを通して培ってきた「礼拝音楽」「賛美歌のことば」の気づきあいを大切に持ち運び、今度は、各人、教会が発信し合いつつ、協力伝道の新しい景色をみなさんと描いていきたいと願っております。声をかけあって、祈りあい、助け合いながら…。

最終回は賛美歌検討関係者による座談会、ほか、各報告からは「これから」の力と励ましとなる言葉が溢れています。これからの礼拝と賛美の取り組み、教会の歩みの一助となれば幸いです。

Index

- 1) 寄稿「雨の中で、豊かな賛美」 教会音楽専門委員 山中臨在（品川）
- 2) 「賛美歌検討委員会議」関係者による座談会
川内裕子（帯広）、坂本献（所沢）、庄司恭子（水戸）、福永保昭（恵泉）
- 3) 書評 日本賛美歌学会新歌集『叫べ、小さな石よ』 濱野道雄（鳥栖）
- 4) 福岡連合教会音楽部主催研修会報告 「賛美で元気に」 麦野達一（福岡西部）
- 5) 地方連合教会音楽担当者連絡協議会報告
- 6) 「新生讃美歌ブックレット研修会」に参加して 木村まどか（栗ヶ沢）、感想から
- 7) 「第13回教会音楽カフェ」「第14回教会音楽カフェ」アンケート 感想から
- 8) 機構改革後の教会音楽の働きについて
- 9) 教会音楽室からのお知らせ

「雨の中で、豊かな賛美」

教会音楽専門委員 山中臨在（品川バプテスト教会）

「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。」（使徒言行録16：25）

予期せぬ雨が降った時、予定が狂い、戸惑うことが多々あります。ずぶ濡れになり、体調を壊すこともあるでしょう。私たちはまさに、雨の中、しかも3年続いた長雨の中を歩んできたといえるのではないのでしょうか。新型コロナウイルスの出現と感染拡大により、それまで当たり前だと思っていた対面の礼拝の開催ができなくなったり、共に声を合わせて歌っていた会衆賛美が、飛沫感染予防のためにできなくなるなど、誰が想像できたことでしょうか。また、バプテスト連盟の機構改革が始まる中で、連盟教会音楽室はなくなろうとしています。教会音楽室の呼びかけで行われてきた礼拝音楽研修会や賛美集会が開催できなくなると、これからどのようなしたらよいのか不安の声も少なくありません。しかし、この雨の中でも気づかされる神様の恵みがあつたのではないのでしょうか。

コロナ下、賛美歌を共に歌えなくなって、私たちは賛美歌の意義を改めて問い直す機会を与えられました。それまで賛美歌の「ことば」に主に関心を持っていた人は、一緒に歌えなくなった時、賛美歌の「音楽」が礼拝者の心をつなぐためにどれほど大きな役割を果たしているか知ることができました。そして一緒に賛美歌を歌えることは何と喜ばしく素晴らしいことなのだと改めて気づかされました。賛美歌の「音楽」の部分に主に関心を持っていた人は、歌えなくなって改めて賛美歌のことばの大切さと豊かさに気づくことができました。それまで歌詞の意味を考えずに、慣れ親しんだ賛美歌のメロディに心地よくなっていただけだったかも

しれないことに思いをはせることもできました。歌えない時こそ、賛美歌には「ことば」と「音楽」が密接に結び合い、支え合い、活かす合うために必要不可欠なものであることを知る絶好の機会でした。また、「教会音楽カフェ」や「新生讃美歌ブックレット研修会」を通して、礼拝音楽に関するさまざまな悩みや課題を分かち合い励まし合う友が全国に多く与えられていることを知りました。たくさんの喜びと希望を与えられたことを主に感謝しています。

パウロとシラスが鞭で何度も打たれて牢に投げ込まれた時、真夜中に彼らが賛美の歌をうたうと、ほかの囚人たちはこれに聞き入りました。賛美の歌を真夜中の牢獄でうたうことなど誰が考えるでしょう。しかもパウロたちは鞭で何度も体を打たれているので、声もほとんど出ないはずですが、しかしパウロとシラスは、そのような状況下で賛美の歌をうたったのです。しかもほかの囚人たちはこれに聞き入っていたといえます。真夜中に歌をうたうなんて安眠妨害の非常に迷惑な行為ではありませんか。それなのにこの賛美のうたに聞き入ったということは、皆の心に触れる感動があつたのではないのでしょうか。そこには、心からなる礼拝が捧げられたことでしょうか。その後さらに大地震が起こり、事態は最悪の方向に向かうのかと思いきや、そこから主を信じる者がおこされるという、誰も想像できなかった主のわざがなされました。

私たちが礼拝に招かれるのは、必ずしも自分に都合がいい時とは限りません。それは真夜中かもしれません。雨が降っているかもしれません。最も都合の悪い、最も礼拝にふさわしくないと思う時でさえあります。しかしそこにこそ、真の礼拝があり、真の賛美があるのかもしれない。

れません。雨は作物を育て豊かな実りをもたらす神様からの贈り物です。雨の中だからこそ豊かにされ前進する協力伝道があるのではないのでしょうか。賛美歌において、「ことば」と「音楽」が互いを必要としていたように、私たちも互いを必要としています。今こそ私たちは心を合わせ、真

夜中をやがて朝に変え、雨雲の上から私たちに愛を注がれる希望の主を見上げて、心からの礼拝と賛美を捧げていきたいと思います。

「礼拝さいこう」座談会 第3弾！（最終回）

座談会メンバー 川内 裕子（帯広バプテスト・キリスト教会） 坂本 献（所沢キリスト教会）

庄司 恭子（水戸バプテスト教会） 福永 保昭（恵泉バプテスト教会）

司会：江原 美歌子教会音楽室長

機構改革を前に、総括として位置付けてきた座談会の最終回のテーマは「賛美歌検討」です。第3弾では、これまで、委員または「評価チーム」メンバーとして賛美歌検討委員会議に関わってこられた皆さまに、お集まりいただきました。まずは自己紹介をもって、和やかに語り合いを始めていきました。

福永：恵泉教会牧師、新生讃美歌編集委員だった関係もあり、最初の検討委員に加わった。

川内：帯広教会牧師、賛美歌検討委員ではないが、『新生讃美歌ブックレット』の用語解説の校正、21年度からはチームによる賛美歌評価、検討チームとして関わっている。

坂本：所沢教会牧師、11年度から検討委員。新生讃美歌編集時にはA、B、Cの分科会の一つに入れていただいた。古澤嘉生さん、寺園喜基さん、青野詔子さんが入っていて、作業は楽しかった。

庄司：水戸教会員、教会では奏楽、聖歌隊、礼拝賛美チームリーダーをしている。16年に仕事を辞めてから、北関や連盟等、水戸教会外の音楽活動に関わる機会が増えた。

賛美歌検討委員会議の立ち上げ

司会：『新生讃美歌』発刊後、2004年の「新生讃美歌フォーラム」で、大谷レニー前新生讃美歌編集委員より「2003年版編集時では、研究・検証ができなかった、今から始めていただきたい」と提言があった。それが基となり2009年に賛美歌検討委員会議を設置していった。

福永：大谷提言は、いざ改訂となったときに備えて、今から研究を開始してほしいということだったと思う。改訂のサイクルは25年といわれているが、『讃美歌』54年版から『讃美歌21』までは40数年かかっていることもあり、日本では「改訂の25年のサイクル」は現実味がないのではないかな。しかし『新生讃美

「礼拝さいこう」座談会 第3弾！

歌』も20年を迎えようとしており、改訂は意識させられている。

私は編集委員の一人で、編集時には、「曲を絞ったほうがよい」という意見もあったが、結局、いろいろな曲が入ったことは多様なバプテストらしさとも言える。どのように礼拝で使用するのか、どのような教会形成をしたいのかなど、総合的に「賛美歌集」を捉えていこうとすることも求められてきた。それを踏まえて1曲ずつ評価する検討を始めていったと思う。評価基準の5段階評価は、江原室長が紹介した聖公会の評価方法を参考にした。当初は問題指摘、批判的な意見が多かったが、大変勉強になった。

司会：「賛美歌を評価すること」についてどう思うか？ 21年からはじまった「評価チーム」を経験して感想は？

川内：3名で1回で3曲、計6曲の検討をした。それぞれの視点から多角的に検討できたことはよかった。ズームで北海道と九州という隔てを超えての会議も有難かった。評価では「保留」も結構あって、「問題無し」というのはあまりなかった。翻訳曲では、日本語だと字数が多くなりメロディに入りきれない部分があったり、リズムのあて方の難しさなど、さまざまな意見が出された。

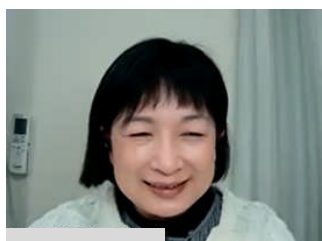
庄司：賛美歌評価検討チームに2回参加した。賛美歌の成り立ち（作詞者・作曲者・訳詞・時代背景等）を調べることによって賛美歌について知り、チームで話し合う事でより理解を深めることができた。賛美歌の楽譜を見る

と、作詞者、作曲者だけでなく、作曲年代、歌詞の意味に注目するようになった。原詞と訳詞の問題は大きいと思った。どのような言葉に訳すかで、伝わる内容が変わってくる。また、「歌にくい」「意味がわからない」「あまり歌われていないけれど良い賛美歌」など気づきがあった。賛美歌集の賛美歌を選ぶという作業の大変さを知った。

司会：評価の中で、天皇制用語が多々取り上げられたこともあり、2013年には辻子実さん（恵泉教会）を招き研修した。質疑の中で、参加者から「賛美歌を吟味していいのですね」との感想があったのは印象に残っている。賛美歌の中身は触れてはいけないものと思っていた人が多かったかもしれないが、「吟味していい」という言葉は、「賛美歌のことば」の検証と推進にとって大切なキーワードになっていったと思う。

恵泉教会との対話を振り返る

福永：投げかけは2013年の定期総会の事前質問からはじまった。歌詞の質問、天皇制、不愉快語、聖書的根拠、歌詞用語集要望、戦争責任告白に対する質問があげられ江原室長が回答している。2018年には、恵泉教会として「『新生讃美歌』に関する私たちの決意表明の件」（天皇制用語に関する用語使用回避）を定期総会に上程した。2014年8月に石丸新氏を招いた教会研修では、「御」が付く言葉の問題を挙げられた上で、「御稜威（みい



川内裕子（かわちひろこ）

帯広バプテスト・キリスト教会
『新生賛美歌ブックレット』
用語解説校正協力
賛美歌検討委員会、評価チーム
2021、2022年
評価チームメンバー：麦野達一、
麦野加恵

つ)」の問題性について指摘された。『新生讃美歌』18番と274-276番に「御稜威」があり、編集委員会でも議論した言葉だったが、編集の過程で入ってしまった。またこれらの讃美歌には著作権があるため、簡単には変えられない。恵泉教会内では、この「御稜威」は礼拝での使用は避けるべきという見解をもっている。

連盟、理事会とも対話を重ねる中で、讃美歌検討委員会議の報告の開示を求めたこともあった。そこでは評価の「5 削除」すべきは、慎重に取り扱ってほしい等を要望した。その後『新生讃美歌ハンドブック』が発行されると、素晴らしさと共に課題をも共有できるようになった。また、アンケートを取られるなど、恵泉教会だけでなく、連盟全体でことばの検証の運動を推進してくださり、今の「讃美歌のことば」の研修につながっていったと思う。現在の検討は、訳語やことばの課題に特化しており、讃美歌の歴史や、編集とは何か、というところまでは至っていない面もある。

司会：相模中央教会では、今年度、初めて「讃美歌のことば」の研修を聖歌隊研修会でとりあげ、「讃美歌のことば」について意識することの大切さを皆で学びあうことができ好評だった。教会で取り組みが始まるとよい。

川内：なかなか教会から讃美歌について投げかけていくのは難しい。恵泉のとりくみはすごいと思う。

福永：今教会で課題になっているのは「処女」という言葉。「讃美歌は礼拝、教会の神学を作ること」を思い歌おうと、励ましあいながらやっている。

讃美歌のことばを巡って

司会：「讃美歌のことば」について、どう受けとめているか？

川内：「音」の中に、言葉をあてはめなければいけないということがあって、そこに、私たちの信仰告白がどう込められているかという課題がある。しかも、文語体のことばが残されていたりすると、現代人には、理解しにくい言葉もある。ただ、含蓄のあることばが神を賛美し、自分たちの信仰を表わすのに「よいね」という方も教会におられる。讃美歌は「ことば」だけでなく「音楽」も大切だと思う。「バプテストは『ことば』ばかり検討するのね、讃美歌って音楽じゃないの？」と他派の方からいわれたことがある。讃美歌は音楽とことばのハーモニーであって、そこで信仰をどうあらわしていくかという奥深いものがある。

司会：讃美歌はことばですか？音楽ですか？

坂本：ことばと音楽は一緒だと思っている。日本語には音の高低があって難しいが、日本語の作詞作曲は歌いやすい。「歌う（ウタウ）」の語源は「訴う（ウトウ）」であり、歌は悲しみ、叫び、喜びを「うったえる」が

坂本 献（さかもと ささぐ）

所沢キリスト教会
新生讃美歌編集時分科会メンバー
讃美歌検討委員 2011～2022年
「中間報告」『新生讃美歌ブックレット』の執筆に携わる。



「礼拝さいこう」座談会

ルーツ。魂が響くなかで、ことばが響きをもって音となっていくのだと思っている。加えて賛美歌は信仰の告白であり、教会が受け、見だし、共有されていく神学のまとまりが賛美歌だと感じている。聖書は変えられないものだが（翻訳等の課題を除いて）、賛美歌は人間のことばであり、時代のなかで問われながら、吟味されながら、歴史の中で歌われながら、取捨選択され、2000年背負ってきた中でのことばなので、教会、聖書を学ぶ教科書にもなり得る。

司会：「賛美歌のことば」の推進のきっかけは、「ことば」で「つながれる」ことの経験から。ワーシップ・ソング、伝統的なものなど、賛美歌には様々なジャンルがあつて、特に音楽では嗜好の違いが障壁になる場合があるが、青少年や特別委員会との対話の中で、「ことば」が対話の共通項であることに気づかされた。

坂本：歌を伴ったことばが響く。牧師等は礼拝の説教の中でもみ言葉と賛美歌の響き（和音）を考えているだろう。

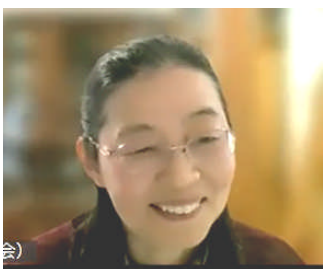
福永：ことばと音楽が一緒だから訴えるものがあると思うが、ことばに共感できないときがある。「命ささげる」といったときに、戦争の犠牲を思って共感ができない人がある。また、神学校時代、左近淑先生にクラスのキャンプで『ともよ歌おう』を聞いていただいたことがある。「神さまがわかるでしょう」について「共感できない」「わからない」、と言われ、「語りませ主よ」は「わかる」と言われたのを驚いて聞いた。その時、言葉の大切さに気付いた。

坂本：賛美歌検討の学びの中で、共感できないことばに気づかされてきた。共感する意味、しない意味をそれぞれが考え、相互理解していかなければ共同体としてなりたないし「共感できない」感情を排除せず、大事にすることで、教会は変わっていかなければならない。その過程で賛美歌の言葉は変えていい。

庄司：2016年の礼拝音楽研修委員会に参加するまでは、私にとって賛美歌は音楽が優先しており、素敵なメロディや歌い易いから好きというものだった。その研修会ではじめて「ことば」の重要性に気づかされた。賛美歌のことばが大事で、勉強しなければならないと思った。自身は音楽、和声の美しさに目を向けがち。音楽が専門でない人の方が、ことばに関心を持ち、敏感な人が多いのではないと思う。

司会：アンケートに寄せられた課題の中で、賛美歌の「けがれ」「命ささげます」のことばがとりあげられてきていて、現段階は「歌っていない」「課題とを感じるが歌っている」「もやもやして歌えない」「聖書の中の文脈を学び歌う必要がある」など、いろいろな意見が交わされている。皆さんはこのことばをどう受け止めていますか？

坂本：「すべてを捨ててイエスに従った」という言葉があるが、ペトロもパウロも全てを捨てていないし、関係性等も捨ててはいないし捨てられるものでない。教会で用いられてきた、いわゆる「教会用語」がますます通じにくい時代。「捨てる」ことが「重荷」「強制」等と捉えられるなら避けるがよい。「け



庄司恭子（しょうじさきこ）

水戸バプテスト教会

評価チーム 2021、2022年

評価チームメンバー 武章子、
富岡真奈、秋山信夫

カフェやブックレット研修会に
多数出席。

がれ（穢れ、汚れ）」は「清め（浄め・聖め）」と対のことば。私が思うに人間は「けがれ」の自己認識があり、多くの宗教においても、身や心を清める表現がある。「罪」を犯さなければ生きていけないと知っているがゆえ、清められたいという思いが根底にあると思う。ただし、対人（個も複も物品も）に対して使うと問題。「この人は、罪びとだ」（「聖」との規定も同様）と人が規定し裁く心や行動が「罪」だとイエスは語っている。イエスの時代も苦しんできた人がいる、今なお「けがれ」の「け」を聞くだけで痛んでいる人がいる。常に福音から語らなければならない。人は裁くのが好きで、人に対して「けがれ」と言う時、その人が「善悪を定めることができる唯一の神のごとき存在」になる。

庄司：ことばが気になるようになると、選曲するときに戸惑う。自分の立ち位置を考えたり、課題のある節を省いたり、歌詞にアーメンと言えるかと問うようになったりした。少しずつ発信したり、皆で話し合ったりする場を持っていけるとよいと思う。

福永：賛美歌は「われらの歌」ということ。「私たちの信仰告白の歌」「われらの歌としてどう歌えるのか」等、吟味させられてきている。「聖書は与えられる」という構造と同じように、賛美歌もそう理解してきた部分がある。「私たちの叫び」はどこにあるのか、私たちが教会で求める歌はどこにあるのか？の意識がでてきた。それは、意識的に教会をどうつくるか、教会をどう作り、参与するのかと直結していて、教会形成のことに結びついている。教会の中には、上から目線の言葉

や、開拓精神的な海外宣教派遣のようなことばを嫌っている人もいる。「共に生きる」という世界にあって、どういう歌を歌うのか求められている。単に差別用語を排除するだけでなく、新しい時代の文脈の中で、聖書から示唆された「あたらしい言葉」を作っていくことではないか。

司会：ある集会で、賛美歌の言葉に「みたま」があったので、「集会では『聖霊（せいれい）』と歌い替えます。」と説明があり、会衆賛美で歌ったことに対して、一参加者から集会の最後に、「参加者に問うことなく、一方的に『ことば』を変更したことに違和感を感じた」と意見があった。この投げかけを通して、賛美歌のことばは「教会形成」のこと、共同体の中でことばを共有しているのだから、賛美歌のことばは皆で作っていくことがらだと気づかされた。

庄司：水戸教会の礼拝の開会唱で、1番「聖なる聖なるかな」の3節、「罪ある目には見えねども」4節「神の大み名」とあって課題に感じていたため1、2節のみを歌っていた。全節を歌う事になったとき、4節を「神のみ名をば」と変えることを牧師に相談して、プロジェクトの言葉を書き換えてもらった。そのことについて礼拝の前に牧師が説明して下さったことは有難かった。しかし、言葉を変えればよいという問題でないことにも気づいている。

福永：会衆のことにするにはどうすればよいのか。恵泉教会では、礼拝部がつくった評価表を報告している。牧師やひとりの意見で決めてしなわないようにということだろう。

福永保昭（ふくながやすあき）

恵泉バプテスト教会
前新生讃美歌編集委員
賛美歌検討委員

2009、2010、2013、2014年



「礼拝さいこう」 座談会

坂本：コロナ感染拡大防止の観点から全節歌わないのは、良い面もあった。歌詞を読んだ上で選びとったり、歌詞で課題がある場合は、牧師等が言葉（注釈）を添えたりできる。賛美歌の用い方について、教会が考えていく必要を感じる。礼拝（教会）音楽研修会等、牧師など参加していない方の意見に、「音楽はわからない」「奏楽者に任せている」という声を聞く。礼拝の中の賛美歌は大切な要素で賛美歌を歌う、聴くという行為を通して教会が創られていくことを学び合いたい。

川内：北海道で大谷レニーさんが講演して下さった際に、「罪ゆるされし」の中の「われ何をもちて」は「私たちの信仰にはそぐわない、私たちは『何をもっても応えられない』から」、と言われたのが印象に残っている。それまでは、楽譜にある通り、歌詞をそのまま賛美していたが、これに「アーメン」と言えるかを考えながら歌うのが大切だと気づかされた。それ以来、賛美歌を意識して選ぶようになった。牧師として賛美歌を選ぶことが多いが、応答の賛美歌で説教が完成すると思っているため、献身、決意を求める賛美歌を選ぶ傾向がある。その中で、「このことばはいきすぎか？」「これは皆をひっぱりすぎではないか？」「じわっと皆さんに感じてほしい」という思いで、賛美歌を選んでいく。「命をささげる」「すべてを捧げる」など、まっすぐすぎることばは使い方が難しく、戸惑うことがある。

坂本：かつて連盟総会でアジアの賛美歌をとりいれてほしいという意見があった。アジアの賛美歌といっても、アジアも宣教師がもたらした、歌い易く分かりやすい福音唱歌が歌われてきた場合が多く、そこから芽が出て自らの言葉による信仰告白の賛美歌になるには100年にかかる。時代の中で、信仰のことばが受容され、さらに「生きる言葉」となる過程の中に私たちは生きているのだろう。

司会：この他、賛美歌の中で表わされる「犠

牲」に関しては性差別問題特別委員会、靖国神社問題特別委員会からは、キリストの犠牲が、社会で強いられている犠牲や、天皇制にみられる犠牲のように美化された形で賛美歌の中で歌われるとき、誤ったメッセージが送られてしまうという課題への指摘がある。また、教会の内と外、「キリストを知らない人々」と対象化する賛美歌も多々あり、賛美歌の「神学」（中身）の課題に関しては、早急に検証する必要がある。

坂本：聖書の中に「贖い」や「命を捨てること」の表明は確かにある。ただ、関連してステファノやペトロなどの殉教が美化された歴史や聖書理解がある。その理解や構造が国や人のために美化されて使われた。「贖い」はイエスの死で最後にしなければならなかったものであり、ステファノには逃げてでも生きてほしかった。国（権力等）と宗教が一体化することを相互の利益とする罪は指摘していかなければならない。

福永：賛美歌ができた時のテーマ、時代性がある。今の時代、どのようなことばで分かちあっていくのか？は考えることができる。家族像を押し付けるもの、たとえば『新生讃美歌』584番「主なる神よ み言葉にみたされ」のようなものは検討が必要になってくるだろう。編集委員会では「雄々しく」も議論にあがった。

坂本：例えば「きよめ」を「ゆるし」、「捨てる」を「生きよ（受けよ）」と表現を変えた歌もある。私は祈りでは「父なる神」ではなく「主なる神」と呼びかけている。結婚がテーマの賛美歌にも課題がある。

司会：福音唱歌は馴染んでいるが、課題のあることばは歌い替えたほうがよいと思うか？

坂本：1曲ごとに吟味して、変えていきたいが、著作権の問題は大きな課題で、『讃美歌』『聖歌』の歌詞は簡単に変えられない。ホーリネス派の中田羽後の訳は、この時代と

我らの信仰でそぐわないものがある。

福永：残るものは残るだろう。文脈も大事なので、使い方を誤ると思われるものは、説明して使っている。

司会：これからは「新しい歌」を歌っていきたい。新しい視点、現代の宣教課題を歌う歌を歌いたい。

坂本：ヒム・エクスプロージョンの作家が、伝統的なメロディに新しいことばをつけたのは参考になる。

福永：フレッド・ブラット・グリーンやブライアン・レンといったヒム・エクスプロージョンの作者の歌集を見たことがあったが、自由に歌えるように歌詞とミーターのみが紹介されていた。但し、西洋の8686のミーターなどが、日本の詞とあうか？の問題は残ると思う。

川内：詞と曲のマッチングがぴったりの曲が賛美歌検討時にあったが、それは稀なケースだと思う。祈り会では『新生讃美歌伴奏CDROM』を使って知らないものを選んで歌っているが、誰が作ったか？時代は？など、あーでもない、こーでもないと楽しく話している。

司会：「あーでもない、こーでもない。」とはいいですね。「検証」とすると敷居が高いが、祈り会など小グループから始めるといいですね。

川内：祈り会は4-5人の人数で、気軽にパソコンで調べたりする中でいろいろ発見できて、賛美歌に親しみがもてるようになっている。

『バプテスト・ユースソングブック』に掲載されている曲も「少し前」の曲になるが、私たちの今の言葉で賛美するということでは、参考にすべき大切な働きではないか。

「これもさんびか」という新しい賛美を創る働きがあるが、そのような賛美歌をいろいろな共同体で歌ってみて、これは私たちの信仰

告白になるか？など、吟味していくのもよいだろう。個人的には古い賛美歌も好きで文語体も抵抗がないが、「これ」でないと今の信仰を告白できない場合がある。以前は十字架の贖いが大きなテーマだったが、今は「一緒に生きていこう」ということばが語られる中、昔の賛美歌には、ふさわしい賛美歌を探すことができない場合もある。

司会：教会で賛美歌のことばの課題は共有されていますか？ 2021年からは賛美歌評価検討チームをはじめ、各地でチームを作って検討を拡げていたり、「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」では、あえて「ブックレット」という名前を銘打って展開してきた。「中間報告」や『新生讃美歌ブックレット』があることで、感覚的に話すのではなく、積み重ねてきたことを基に語り合えるという「強み」がある。

坂本：「中間報告」はどのように皆さんに知っていただけるか？情報が多くて、消化しきれしていない面がある。

川内：「中間報告」や『新生讃美歌ブックレット』は、教会のいろいろな人の目に触れるのは難しい。自分で手にしないとわからない、そこまでいく人は少ない。そのような人々につなげていきたい。

庄司：『新生讃美歌ブックレット』を読むだけでは理解できていなかったが、「ブックレット研修会」を受けたことで深く理解することができた。教会でも『新生讃美歌ブックレット』をさらに活用できるとよいと思う。

機構改革・今後の展望

司会：新年度からは「新生讃美歌推進担当」のもと賛美歌検討チームが置かれ、『新生讃美歌』検討を継続していくこととなった。

「礼拝さいこう」座談会

川内：検討チームに関わった経験から、検討してきたことがどんな形でもよいので反映されることを望んでいる。「ことば」のことだったら文章で提案もできるのではないかな。

庄司：評価や検討、いろいろな取り組みにより、積み重ねられてきたことが生かされることを期待したい。『新生讃美歌』は連盟の財産、「宣教と賛美は伝道の両輪」ということばをカフェで聞いて印象に残っている。これまで気づかされたことが沢山あって、「知る」ことは大切だと思われている。今後何らかの形で研修は続けていただきたい。

坂本：希望がみえない時代。例えば、神学校入学者が減っている現実を目の当たりにし、教会がどこまで持続できるかが切実なテーマだが、夢を持ちたい。「新生」はバプテスト連盟の基本的信仰姿勢の一つであり、み言葉と聖霊の働きによって日々あらたにされていき、間違いを知る時、悔い改めて主に従っていくこと。『新生讃美歌』も固定されず、変わっていく必要がある。『ユースソングブック』のような小冊子で出していくことなど考えられるのではないかな。「全国小羊会キャンプ」や「少年少女大会」に参加した者たちが、数年、数十年後に手にとって歌ったり、教会で用い、歌っていったらよい。

司会：「新生」ということばに励まされる。これまでの規模を維持することに囚われずに、小さな働きでも「新生」を歌うことに希望がある。

坂本：連盟は小さな歌集を出版してきた歴史が

ある。イエスを伝える人が与えられ、伝道、福音が語られるために私どもの信仰の言葉集でもある「賛美歌集」は重要であると思う。

川内：北海道地方連合にはさまざまな研修を行う研修センターがあり、運営委員長をやっている。先日「賛美懇談会」を開いた。8教会18人ほどが参加し、コロナの中であって、それぞれの教会の賛美の対応など教会の事情をわかちあい、賛美する上での課題などを自由に語り合う懇談会となった。

福永：積みあがってきた「どう歌い替えるか」など一覧にすることもあるが、昔から連盟の集会では、賛美歌を聖歌隊などで発表し合うと出席人数も増え、人を巻き込むことができた。皆でつくる集会のような推進はバプテストらしいし、会衆教会の皆が関わる運動となる。

坂本：大会で分かちあわれた賛美歌経験は時に言葉以上の重みがある。

福永：半面、大会頼みの反省もあるだろうから、内実を問いかけることも大事。運動論としては、両者のバランスがあるだろう。いずれにしても参加型で皆がアクセスできるような場を作っていく必要があるだろう。室がなくなると推進の中心核を失う気がするが、「私たちは賛美する群れ」という信仰告白運動を推進担当者からなげかけていただきながら、草の根運動のようにして、互いに励まし合いつつ進んでいけたらと願う。

…対話がこれからも続けられることを大いに期待して、祝福の内に、座談会を終えました。



『Let a Tiny Stone Shout Out: Imagining New Japanese Hymns 叫べ、小さな石よ』

編集：日本賛美歌学会 アメリカカナダ賛美歌学会100年記念国際大会訪問プロジェクトチーム
(荒瀬牧彦、江原美歌子、水野隆一、宮崎光、山本美紀)

西南学院大学神学部教授 濱野道雄

皆さんと一緒に賛美して歌いたい。そして日本におけるキリスト教の新しい展開に期待しつつ、共に歩み続けたい。この賛美歌集を「読んで」そう思われました。

この賛美歌集は日本賛美歌学会が、アメリカ・カナダ賛美歌学会2022年度大会のために編纂したのですが、個々の賛美歌は『新生讃美歌』を含め、日本の各教派の賛美歌集に主に1990年代以降収められたものが集められ、英語で歌えるように翻訳されています。

タイトルの「叫べ、小さな石よ」はルカ19:40「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶだろう」からとられており、「日本のキリスト教徒は国内人口の1%以下という、とても小さな教会ですが、神が『極めて良い』ものとして創造された世界の回復のための使命を遂行しています」（序文）とあるように、小さな石だからこそ、マイノリティであるからこそ果たせる教会とキリスト者の使命と賛美に満ちています。

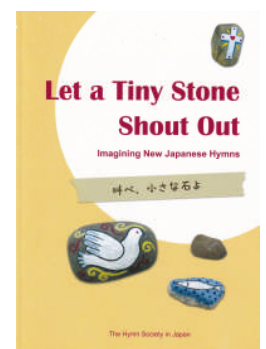
全32曲の内容は7つに（必ずしも厳密にではないにしても）分かれており、そのマイノリティ性を歌った「小さな町があった」（1番）から始まり、日本（ヤマトと沖縄）の伝統的な民衆のメロディ等による賛美歌（2～5番）、日本の霊性とキリスト教信仰の出会いから生まれた賛美歌（6～10番）、青少年等における人権と自己肯定感の低さに寄せる賛美歌（11～18番）、平和と正義を祈る賛美歌（19～26番）、危機（東日本大震災と新型コロナウイルス）の中での賛美歌（27～29番）、そして希望を歌い続ける教会としての賛美歌（30～32番）にまとめることもできます。

日本独自の歴史と社会、文化の文脈から言葉とメロディで紡ぎ出されたこれらの賛美歌は、欧米神学の追従ばかりで未だに明確になることの少ない「日本の神学」「日本の宣教論」を、共有できる形にしてくれたものなのでしょう。例えば日本の家父長制に加担してきたかもしれない教会の自己批判ともとれる16番「わたしはおやを」や、東京電力福島第一原子力発電所事故を思う26番「いのりではないか」など、刮目すべきものがあります。

きっとここからさらに新しいものも期待できると思います。例えば、平和と正義を祈る賛美歌において日本の加害者性に触れたものは1曲（25番「気づかせてください」）ありますが、さらに展開すべきだと自分の責任として思いますし、きっとどこかで歌われているのではと思います。

私は音楽の賜物を磨いていないため、これを「歌う」とどうなるのか分からず、多くは歌詞を「読んだ」だけです。しかし賛美歌は論文と違い、他の人々と共に、繰り返し歌う中で、その歌詞の「行間」や「文脈」が論文とは比べ物にならない程に輝き出すことを知っています。ですから、学会資料としてだけでなく、外国籍の方々が増えてきた日本の教会で、その礼拝で、英語でも日本語でも歌うための賛美歌集として用いられることを望みます。この「礼拝さいこう」も最終号ですが、このような新しい賛美歌をこれから共に歌い、祈りを共にささげ、なすべき使命に向き合うなら、日本の教会は大丈夫。これからも共に歌いつつ歩みましょう。

書籍のご注文は 日本賛美歌学会
info@hymn-soc.jp まで。



福岡地方連合主催研修会報告

賛美で元気に！

福岡地方連合教会音楽委員長
麦野達一（福岡西部バプテスト教会）

10月10日に姪浜教会を会場に福岡地方連合の教会音楽・礼拝研修会が行われ、連合内14教会から70名を超える参加者が集いました。会の冒頭で福岡生まれの賛美歌「喜びの歌を主に向かって歌え」（新生讃美歌46番）を賛美しましたが、指揮をしていた私の耳と魂にビンビン響く会衆の歌声が伝わってきました。3年ぶりとなる対面開催の音楽研修会で一緒に歌う「この時」を連合の皆さんが待ち望んでいたことが伝わった瞬間でした。

主題講演は連盟教会音楽室長の江原美歌子氏より「会衆賛美さいこう！」と題して語っていただきました。この3年、それぞれの教会はコロナ危機にあって礼拝の持ち方、賛美の仕方を模索し続けてきましたが、そこで見えてきた課題がある一方、コロナ危機を経験したからこそ発見できた豊かさもあることに気付かされました。

講演の中では江原氏が所属しているアメリカ・カナダ賛美歌学会による会衆賛美の定義が紹介されました。「共に歌うという聖なる行いが信仰を形作り、破れを癒し、人生を転換させ、新たな平和を作ると、私たちは信じる」賛



美とは単に声を発するだけの行為ではなく、信仰者の歩みそのものに影響を与えるものであることが示されました。

講演の後は賛美プログラムを持ちました。まず福岡西部教会の麦野加恵さんのリードによって体を使って全身で賛美する楽しい時間を持ち、その後、福岡連合青年会、姪浜教会のナム・ヒョナさんと岩下星南さんによるヴァイオリンとピアノのアンサンブル、そして最後に講師の江原氏と福岡城西教会の原田和代さんによる素晴らしいソプラノデュエットの賛美がなされました。

最後の分科会まで含めると3時間を超える長いプログラムでしたが参加者は満たされた笑顔で会場を後にしていました。翌日お会いしたある参加者は「昨日は楽しかったですね！」とニコニコして言われました。3年ぶりに開催された音楽研修会でしたが、連合がこのような集いを開くことの意味は「共に賛美する」中で「励まされる」ことを通して「元気をいただく」ことであると教えられました。その元気が諸教会に持ち運ばれ、教会が元気になりますように。



今座談会でも取り上げられた賛美歌検討委員会議による「中間報告」（1～100番）（101～200番）は、左記のQRコードより閲覧できます。又これまでの「評価表」を閲覧希望の方は、ehara@bapren.jp までお問合せください。評価を通しての賛美歌の学びあいにご活用ください。

地方連合教会音楽担当者連絡協議会報告

地方連合教会音楽連絡協議会が2023年1月19日(木)にZoomにて開催され、12連合から担当者(代務者)14名、スタッフ5名が集まりました。連合でのとりくみ、課題共有、機構改革後の連合、連盟の教会音楽の働きについて、語り合いました。



北関東地方連合教会音楽委員長 武章子（上尾キリスト教会）

すっかりzoomが定着した今、全国区の会議に距離や時間に大きな負担なく参加できるのは感謝な事でした。ちなみに私は職場から参加！コロナ前では全く考えられません。各連合の「今」を分かち合う中で、教会音楽に限らず教会の活動が制限されたり、孤立しがちな現実を共有でき、同じような悩みには自分達だけじゃないと慰められ、他連合の活動には大いに励まされました。「どうしても賛美したい！」と対面の集會に踏み切った連合の報告には、この長いトンネルの先に出口はある！と希望をいただきました。

また、一番気になっていた機構改革後の不安は皆同様であったことに変な話ですが安堵

し、こうして連合を越えた共有がバプテストとして自分達の足で踏み出す一歩なのだろうと考えました。

我が北関東連合では、隔月第三土曜日のZoom「きたかん奏楽者ひろば」がこの度10回目を迎えました。奏楽者あるあるの悩みや不安を分かち合い、礼拝での賛美歌選曲や奏楽の楽譜紹介など情報交換をする中で、これまでには無かった交流が生まれとても楽しいです。最近では連合を越えての参加もあり、これもZoomならではの。私達の「ひろば」はこれからも連合を越えて共有できる場所になれば嬉しいです。ご興味のある方は、窓口（上尾キリスト教会 武）までは是非どうぞ！

東北連合音楽委員 青山祐一（山形キリスト教会）

今年度2回目となったこの連絡協議会で多くの時間が割かれたのは、日本バプテスト連盟の機構改革による教会音楽の再編とそれに伴う今後の働きについてでした。

教会音楽室がなくなったら「これはどうなる？」「あれはどうする？」という疑問と、何より心配と不安だらけでしたが、組織や担当とともに、「情報発信とその入手方法」「新生讃美歌の著作権、検討・研究、改訂」「教会音楽カフェや新生讃美歌研修会」「その他実技を含む講座や研修会」「相談窓口」など、課題や懸念事項が整理され、未決定のものもありますが、ある程度の方向性が見え

るものとなりました。

一方で、新型コロナウイルス感染拡大によるオンラインの有用性が理解、浸透されつつも、音楽の時と場を共有する大切さを再認識し、「もうコロナのせいにしない」として、感染対策を施しながら果敢に教会音楽の働きに取り組む地方連合の姿、また「教会音楽を通して全国の仲間たちとつながっていれば、聴き合い、喜び合い、励まし合いながら歩むことができる」と、つながることの重みと期待など、新たな変化の中で、新たなものを創り出そうとする希望が感じられるひとときとなりました。

栗ヶ沢バプテスト教会 木村まどか

前回初めてこの研修会に参加し、第1回から参加してこなかったことをとても後悔しました。今回が最後の研修会であることを知り、迷わず参加しました。

今回のテーマは「新生讃美歌のこれからに向けて」。前半は江原室長の講演「アメリカ・カナダ賛美歌学会大会 訪問報告と発題」で、日本の賛美歌編纂の歴史と『新生讃美歌』の歴史、中身、課題、提言がパワーポイントを用いて分かり易く語られ、後半は講演を受けての分かち合いでした。

研修会ではいつも気付きが与えられます。「けがれ」の『け』を聞いただけで身震いをするほど痛む方がおられるということはブックレットp.27にも書かれていますが、今回衝撃的だったのは、『新生讃美歌』50番の「ああ驚くべきイエスの愛よ」の中にある「けがれ」のことばと音楽の課題が紹介されたことでした。私の中で結びついていなかったのです。賛美歌はすべての方が「アーメン」と唱和できること、現代の宣教に相応しい歌詞で創られること、そ

れには牧師、神学者、教会音楽担当者・奏楽者、信徒が繋がっていくことが必要と知りました。分かち合いは、まさにそのメンバーで構成され豊かな時となりました。

『礼拝さいこう』も今号が最終となりました。「礼拝最高、再考、再興、さあ行こう。…」と教会音楽専門委員会議で話し合ったことを思い出します。あの時は「行かない礼拝（リモート礼拝）」など考えてもいませんでした。これから先、どのような時代になろうともどんなことが起ころうとも、講演の最後に紹介されたこの言葉に励まされ、希望を持って歩んでいきたいと思います。「共に歌うという聖なる行いが、信仰を形づくり、破れを癒し、人生を転換させ、新たな平和をつくると、わたしたちは信じる」（アメリカ・カナダ賛美歌学会標語）

機構改革によって教会音楽室は無くなってしまいますが、この学び合いと繋がりは決して無くなりませんように、賛美がますます豊かにされていきますよう祈ります。

感想から… 神学、信仰の内容、言葉に照らしながら、心から賛美ができればと思います。ともに賛美することは、ともに祈ることでもあると思いました。教会では音楽・奏楽チームと牧師、礼拝担当、教育担当などと連携、ともに学ぶ機会があればと思います。地方連合や教会の集会でも教会音楽、礼拝音楽の学びをテーマに企画しても良いのではと思いました。（Y.Y.）

大変な苦勞をして完成された賛美歌集であるにもかかわらず、それを積極的評価にとどまらず、批判的、客観的視点から捉え直す姿勢は、まさにバプテスト！と思いました。今後の課題については、一つ一つ、その通りと思います。具体的には、更に様々な課題があることでしょう。

教会が、礼拝が、賛美がそれらとは無関係ではないとの認識を改めて示されました。社会と教会の役割りの意識のズレが大きくなりすぎないように。

『新生讃美歌』の改訂版を出版できないものでしょうか。これまでの皆さまのお働きに感謝し、そのお働きが今後の教会音楽にしっかりとつながっていきますようにと心からお祈りしております。（N.A.）



「第13回教会音楽カフェ」(12/6) 参加:31名

テーマ「いろいろな賛美を発見しよう！」 感想

それぞれの教会での様々な取り組みを伺うことは、礼拝についての姿勢をあらためて正されるような気がしています。

今回は特に、手話賛美ということをはじめて教えていただき、単なる言葉の置き換えではない、手話という一つの言語表現であること、賛美歌の内容を深く表現するためには、様々な工夫を積み重ねておられることを感動をもって聞きました。また、今現在礼拝出席者の中に手話を必要とする方がおられなくとも、必要とされるときに備えて定期的に集まって手話賛美の練習をされている教会もあることを知り、素晴らしい取り組みだと思いました。(H.M.)

ブレイクアウトルームで「通じる手話賛美」をしたいという話になりました。表面的な手話

賛美で終わってしまったらもったいないです。

「通じる手話賛美」が連盟の諸教会にどんどん広がっていきますように！

コロナ、連盟の機構改革など。ピンチと考えることがいろいろありますが、「ピンチはチャンス」だと思います。連盟の枠組みにとらわれず、本質的なことに気づかされていくのかもしれないですね。神さまに期待しつつ。(M.T.)



「第14回教会音楽カフェ」(3/7) 参加:51名

テーマ「やっぱり『賛美って〇〇!』～希望を語り合おう!～」 感想

初めての参加でした。私は賛美することは好きですが、楽器は全く弾けません。教会でも、奏楽奉仕はもちろん、聖歌隊にも入っていませんので、このプログラムに興味はありましたがなんとなく参加しそびれてきました。

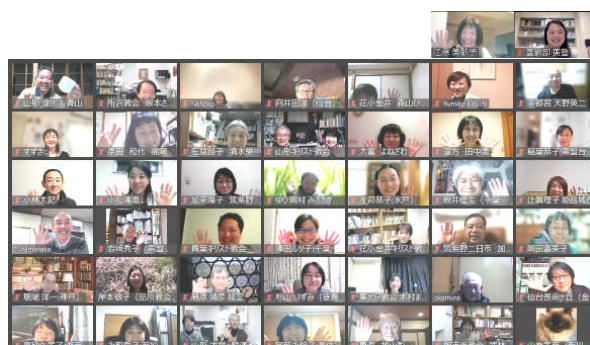
しかし、教会で育ってきたので、賛美(歌)はいつも身近にありました。皆さんのおしゃべりや、それぞれの教会の様子をお聞きするのは興味深く楽しかったです。こんな風に、「ふんふん」と聞いているだけでも気楽に参加できるカフェなら、また参加してみたいです。ありがとうございました。(C.S.)

テーマでは「それぞれの教会にとっての賛美とは?」という視点で日頃感じていることを自由に話し合いながら「そうそう～」と相槌を打ちながら身近に感じる会となりました。

コロナ危機の中でもそれぞれの教会が工夫を凝らしながら、「とにかく賛美は止められな

い!」という共通する思いの中で、賛美の持つ力、賛美が与える喜びを改めて感じる事が出来ました。また、たまたま私達のグループに参加された88歳の方が積極的に発言されている姿に刺激を受け、「私ももう少し頑張らなくちゃ」と思いました。

この教会音楽カフェを通して各教会の様子も知ることができ、大いに励まされ、また新たな気持ちで新年度をスタート出来ることに感謝いたします。(M.O.)



機構改革後の教会音楽の働きについて

これまで教会音楽室では、専門委員会議や教会音楽カフェなどを通して、「これ連」委員の皆さまに声を届けつつ、諸教会の信徒の皆さんがこれからの連盟の改革を理解し参与できるように、対話の場の提供に努めてきました。その都度、礼拝音楽や『新生讃美歌』の推進が、諸教会にとっていかに大切な働きであったかを確認する時ともなり、体制は変わりますがこれらの協議は意味あるプロセスであったと振り返ります。いよいよ、機構改革による新体制が4月からスタートします。新体制への移行に伴い、現段階の「教会音楽」関連での計画について、以下ご案内します。

常設委員会のもとにある研修委員会

研修委員会は以下のメンバーが選出されました。（敬省略）

金丸真（長命ヶ丘、長）、鈴木千鶴香（長住、会計）、藤井義喜（青葉、記録）

田中伊策（直方）、矢野由美（千葉）、山下真実（ふじみ野）

藤井秀一（花小金井）2022年度賛美歌検討委員、山中臨在（品川）2022年度教会音楽専門委員

現在、決定しているのは、3年に一度のバプテスト大会の企画推進ですが、この他の具体的推進について、新年度に入って検討していくこととなっています。研修等の問い合わせ窓口等、バプテスト誌や連盟ホームページ等、発信される情報をご確認ください。

教会音楽研修センタープロジェクト

研修委員会のもとに置かれるプロジェクトです。プロジェクトの具体的な内容については、新年度に入って検討する予定となっています。（予算：40万円）

このプロジェクトは、数年後には、自主運営していくことが目指されており、東京バプテスト神学校、西南学院神学部、九州バプテスト神学校の教会音楽関係の担当者が連携して内容を検討し、働きでは諸教会の研修相談窓口や、研修会の企画推進等が期待されています。こちらの研修等の問い合わせ窓口等、これから発信される情報をお待ちください。

「新生讃美歌推進担当」

『新生讃美歌』発行責任と諸教会に豊かに用いていただくために推進部門が必要なことから担当者が置かれることとなりました。『新生讃美歌』の増刷、不随品（CDROMやCD）聖歌隊楽譜、伴奏譜等の発行や管理、国外の著作権関連の問い合わせの働きなど、今後宣教室が担当してゆく働きへの助言や協力に加えて、『新生讃美歌』ホームページの充実と管理が働きの内容です。『**新生讃美歌**』**ホームページ**はリニューアルが予定されており、現在、工事中の音源演奏や『新生讃美歌』に関連する情報を提供するページを計画しています。この他、**賛美歌検討チーム**が推進担当のもとに置かれ、これからの『新生讃美歌』の賛美歌について、諸教会・伝道所と共に考えていく場を作っていく予定です。新生讃美歌推進担当には江原美歌子（相模中央）が任命されました。

機構改革後の教会音楽の働きについて

賛美歌検討チーム

「新生讃美歌推進担当」のもとにおかれ、これまで賛美歌検討委員会議で行ってきた賛美歌の検証を継続していきます。来年度の計画では、評価フォーラムを年にZoomで2回行う予定で、評価では、ボランティア・チームを募り、諸教会・伝道所が評価を経験していくプロジェクトを拡げていく予定です。賛美歌の評価チームに参加希望の皆さまは、ehara@bapren.jp までご連絡ください。資料提供や評価の手順・方法をお示しし、一緒に賛美歌の検証に臨んでまいります。3-4年を目途に、評価・課題を報告・共有し、諸教会の皆さまとこれからの『新生讃美歌』を考えていきたいと願っております。

教会音楽カフェ

これまで教会音楽カフェの中でも、新年度からの体制に関しては意見交換を重ねてきましたが、去る3月7日のカフェでは、有志によるカフェ運営検討チームで立案したものを提案し、カフェ参加者の賛同を得て始動することとなりました。以下、開催運営についてご案内いたします。

★2023年度教会音楽カフェスタッフ・チーム

リーダー：坂井信生（千葉）、書記：岩崎秀子（常盤台）
山中臨在（品川）、江原美歌子（相模中央）

★ズームアカウントは23年度は千葉教会のアカウントを使用、IDとパスコードは固定。

★テーマは、実施するアンケートの意見を参考に、スタッフチームにより決定。

★ブレイクアウトルームはランダムに、司会者、発表、記録者はグループごとに決定。

★問合せメールアドレス：kyokaiongakucafe@gmail.com

★2023年度の開催日

2023年5月2日（火）19：00～21：00

9月5日（火）13：00～15：00

11月7日（火）19：00～21：00

2024年2月6日（火）13：00～15：00

『新生讃美歌』著作権問合せ、楽譜関連注文

諸教会からの『新生讃美歌』関係の著作権問い合わせは、連盟事務所にお問合せください。楽譜（やさしい伴奏譜、聖歌隊楽譜、コード譜）の注文は、現段階では連盟事務所で対応予定ですが、今後、変更がある場合は、バプテスト誌等でご案内します。

問合せ：048-883-1091（代） kyoukai-ongaku@bapren.jp （左記メールアドレスは今後、変更する可能性があります。つながらない場合は、連盟事務所にお問合せください。）

教会音楽室からのお知らせ

1) 連盟だけで著作権管理をしている賛美歌使用についてご案内

礼拝を録画しインターネット掲載・公開する場合、およびYouTube等で礼拝のライブ配信をする場合、申請不要期間を延長し、**2023年度末（2024年3月31日）まで**、使用許可申請をせずに使用可としました。

※礼拝全体でなく、聖歌隊や個人の賛美のみを配信する場合は、宣教部（宣教室）までご相談ください。また、配信以外（楽譜のコピーや印刷、歌詞の転載など）の利用は使用申請をお願いします。

※具体的な対象曲は、「『新生讃美歌』使用許可申請不要曲リスト2023（インターネット動画配信用）」をご確認ください。（連盟管理楽曲のほか、著作権フリー楽曲も掲載しています）

なお、これまでのリストから対象外に変更となったものもあります。必ず、2023年版の一覧で確認の上ご使用ください。

※『新生讃美歌』関連の著作権の問い合わせは、新年度も変わらず、連盟事務局までお願いいたします。

2) 『新生讃美歌伴奏CDROMバージョンアップ版』（増刷）値上げのお知らせ

ご好評をいただいております『新生讃美歌伴奏CDROMバージョンアップ版』ですが、新体制事務所対応の課題、製造費アップの理由から、価格をこれまでの3000円（税別）から、『新生讃美歌』（B6版）と同額の3700円（税別）とさせていただくこととなりました。ご理解いただきますようお願い申し上げます。なお、増刷版発行は新年度5月以降となります。

3) 今後の情報提供について

これまで教会音楽カフェや「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」、教会音楽ネットワークをご利用くださったみなさまには、**情報メール受信希望アンケート**を実施しております。また、上記以外の方でも、23年度以降の教会音楽関連情報をご希望される場合は、アンケートに回答いただき、送信くださいますようお願いいたします。

期日は3月31日(金)です。4月以降のお問い合わせは、ehara@bapren.jp までお願いいたします。

教会音楽関連の情報希望登録アンケートフォーム

<https://forms.gle/iMnGvfVhMAiHLYLMA>（右QRコードよりアクセス可）



1. 教会音楽カフェの開催情報（教会音楽カフェ運営チームからの発信）
2. 「新生讃美歌」に関する情報
（HPリニューアル情報など、新生讃美歌推進担当者からの発信）
3. 研修会の案内など、研修委員会や教会音楽研修センターからの情報
4. 新生讃美歌の検討・評価作業について

これまで「礼拝さいこう」ニュースレターをご愛読くださった皆さま、執筆等ご協力いただいた皆さまに心より感謝を申し上げます。現在「礼拝さいこう」ニュースレター・アーカイブを閲覧できるよう検討中で、整い次第ご案内してまいります。教会・伝道所、地域、連合で「礼拝さいこう」の取り組みがこれからも祝されますようお祈りいたします。